

在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所主催

第4回大連日本語人材

育成フォーラム

報告書

2021年3月20日（土）13:30～16:00

主催：在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所、中国日語教学研究会大連分会

協力：大連日本商工会、大連市人民对外友好協会、早道教育

目次

●フォーラムの概要	2
●「私の仕事と日本語」をテーマにしたスピーチ	3
「初心を忘れるべからずー私と日本語の物語」張聡（大連吉田拉鏈有限公司）	4
「仕事を通じて感じた実践的な日本語」李驍峰（加賀 FEI 電子科技（大連）有限公司）	6
「中日間の架け橋になろうよ」王姝婷（日本航空大連支店）	8
「丁寧な気持ちは心までの懸橋」路明（大連新起点職業技術学校）	10
「私の仕事に大切なこと」羅焜（野村情報技術（大連）有限公司）	12
「仕事で日本語を楽しもう」金英姫（大連古野軟件有限公司）	14
「私が体験した学校と職場の日本語の違い」趙欣（大連光洋瓦軸汽車軸承有限公司）	16
「考えながら学ぶ」王奕萱孺（住化商務服務（大連）有限公司）	19
「職場における「上品」な日本語」李慰欣（大和事務処理中心(大連)有限公司）	21
「日本語を生かし、仕事の中で私が取り込んでいること」劉丹（全日本空輸株式会社大連支店）	23
●パネルディスカッション「日本語人材の実践的な活用」	25
パネリスト： 高木純・大連日本商工会会長、LIXIL 通世泰建材（大連）有限公司総経理	
齋藤実敏・大連遠東数碼有限公司（YDD）顧問	
陳岩・大連外国語大学教授、中国日語教学研究会大連分会会長	
杜鳳剛・大連理工大学教授、大連中日友好学友会会長	
モデレーター：大熊雅昭・在大連領事事務所次席領事	

文責：在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所

※1 本報告書における記述は全て発言者個人の意見であり、所属する企業、大学及び団体の見解を代表するものではありません。

※2 本報告書の著作権は在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所に帰属します。

概要

1 日時

2021年3月20日（土） 13:30～16:00

2 場所

大連市瑞詩酒店（スイッシュホテル）7階宴会場

3 主催、協力団体

主催：在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所、中国日語教学研究会大連分会

協力：大連日本商工会、大連市人民対外友好協会、早道教育

4 目的

大連で活躍している若手日本語人材に、職場で実際に日本語を活用して企業、社会に貢献している様子を、「私の仕事と日本語」をテーマにスピーチしてもらい、その経験を日系企業や教育機関関係者と共有し、新しい時代やニーズに対応したより実践的な日本語人材活用のあり方について議論を行う。

5 結果概要

3月20日、当事務所及び中国日語教学研究会大連分会主催、大連日本商工会、大連市人民対外友好協会、早道教育共催の第4回日本語人材育成フォーラムをスイッシュホテルにて開催しました。会場には約80名の日本語教育関係者及び日本企業関係者が参加し、オンラインライブ中継の視聴者は約2300人に達しました。

亀井啓次所長は、主催者挨拶で、本フォーラムに先立って行われた、当事務所主催「私の仕事と日本語」エッセイ募集に応募された120件の作品について、作品を通して大連の日本語人材の活躍ぶりを感じることができたと同時に、大連の日本語人材のレベルの高さを改めて認識した旨述べました。

上記エッセイから選出された、通訳、金融、建築、教育等幅広い分野で活躍されている10名の出場者は、職場で実際に日本語を活用している体験談を日本語でスピーチしました。

その後、大熊雅昭領事、高木純・大連日本商工会会長、齋藤実敏・大連遠東数碼有限公司顧問、陳岩・中国日語教学研究会大連分会会長、杜鳳剛・大連中日友好学友会会長によるパネルディスカッションが行われました。

第一部

スピーチ

テーマ：「私の仕事と日本語」

初心を忘れるべからず一私と日本語の物語
張聡 （大連吉田拉鏈有限公司）

最初に日本語との巡り会うのは立川俊之の「それが大事」と言う歌でした。初めて聞いた時に意味が分からなくてもすごく感動しました。そしてたまに友人は日本のアニメとドラマの DVD を貸してくれました。その中にポジティブの物語が多くて、当時少女の私をたくさんに励ましてくれました。そのおかげで日本の文化と日本語に興味を持ちまして、日本に行きたい、日本語を勉強したいと思い切って大学では日本語専攻を選びました。大学で使った教科書の内容は重要でした。一番難しいのは敬語の使い方でした。先生はいつも「使いなれたらだんだん覚えられるよ」と言われてましたが、なかなかむずかしかったです。使い方をよくするために、朝 5 時に起きて、例文を暗唱した事があります。もちろん日本語教科書の知識を勉強するだけではなく、日常会話も重要でした。それを鍛えるため、漢学院（中国語を勉強する日本人の学校）の日本人留学生とも友人になって休みの日に食事をしたり、ショッピングをしたり、交換日記をしたりしてお互いに勉強しました。大学期間に日本語試験を合格するために勉強したのは、今思えば貴重な時間で懐かしいです。

大学を卒業して日本に留学したいですがなかなかお金がなくて諦めました。どうしても日本語を活かしたくて同年 9 月に日系企業に入り、品質保証部で取引先監査の仕事を担当しました。フォークリフトを製造するメーカーなのでいろんな部品を現地調達に切り替える必要があります。本社の技術指導者と連携して国内出張で色々な取引先の品質監査を行いました。品質管理、ISO そして、鑄造部品に関するたくさんの専門用語が分かりませんでした。大学で日本語を専攻しても分からない言葉が沢山ある事を初めて知りました。仕事中にメモをする、分からない言葉があれば謙虚に聞く、そしてメモの内容を暗記する、これを繰り返すと段々と仕事場で使用できる単語が増えてきました。本社の方とメールをする時にも日本人の書き方、ビジネス用語の使い方をメモして、暗記して次回に同じように運用して練習しました。こういう風に一生懸命勉強してようやくに日本人らしい日本語を使えるようになれると思います。

2018 年から派遣員に関する仕事を始めました。細かくに言えば大連にくる日本人赴任者の住宅、工作証申請、居留許可更新など様々な手続きを担当しています。こういう仕事は人との付き合いが多くて一番重要なのはコミュニケーションの能力だと思います。日本の文化には日常五心と言うことがあります。これはコミュニケーションのコツだと思います。日常五心をもっていればなんでも乗り越えられる、これからいくつか自分の経験として説明します。一は「素直な心（はい）」仕事でも生活でも誰かに

呼ばれる時にあるいは会話の途中に「はい」と相手に返事すれば聞いているね、と思ってくれます。これも相手を尊敬する表現だと思います。二は「反省の心（すみません）」以前日本人派遣員と一緒にビザの写真を取りに行った時、本人は白いシャツを着ていました。「背景と同じ白色なのでそのシャツは避けた方が良い」と伝えましたが「白いシャツはダメだと事前に言ってくれなかった」と指摘されました。「すみません」と素直に反省しました。なるほど、自分は常識だと思いますが説明しないと分からない人もいます。三は「謙虚な心（おかげさま）」日本での挨拶、お元気ですか、お陰様で元気ですよ。日常の会話でもいつも謙虚の心を持ちます。四は【奉仕な心（私がします）】例えば上司が難しい仕事を任せる時にできないと思っても文句を言わずまずはやる、やらないと分かりません。やってみて想像より簡単だと思った事が多いです。五は【感謝の心（ありがとう）】。他人を感謝するだけでなく、自ら行動すれば人は感謝してくれます。例えば、すぐに日本人のメールに返信すれば相手は「早急に返事してくれてありがとうございます。」と感謝してくれます。こういうケースは多いです。

言葉はとても美しいものです。違う国でも言葉が通じれば、心はいくらでも近くなる事が出来ます。日本語のおかげで今の私がいます、私にとって日本語は仕事でも生活でも不可欠な物です。これからの人生にも初心を忘れるべからず、日本語ともっと良い物語を作りたいです。日本語をよろしくお願いします。



仕事を通じて感じた実践的な日本語
李驍峰 （加賀 FEI 電子科技（大連）有限公司）

皆様ご存知の通り、中国と日本は一衣帯水の隣国です。日本は先進国の一つで、とりわけ科学技術面においては世界最先端のレベルにあります。一方、中国は世界で一番大きい発展途上国で、物凄いスピードで経済発展を続けています。経済及び貿易の面においては中国と日本は補完関係にあるので、日本語をマスターしたら、将来の就職に有利だろうという発想で、大学2年生の時に独学で日本語の勉強を始めました。

大学卒業後、日本語が少しできるおかげで、憧れの日系企業にすんなりと採用されましたが、入社したばかりの私は日本語が少しできるといっても、単なる読み・書きぐらいで、片言の会話しかできないレベルでした。私が勤務している会社は日本に向けて組み込みソフトを開発する会社なので、仕様書、設計書、マイコンマニュアルなどのドキュメントはほとんど日本語で書いてあります。さらに仕様書とマイコンマニュアルの中には割り込み、ウォッチドッグなどの専門用語が沢山あるため、最初の頃はとても苦労しました。専門用語の日本語の説明は理解が難しかったので、私は、専門用語をいったん英語に訳してから意味を調べることで、日本語の専門用語を覚えめました。

また、お客様とのウェブ会議でレビューや打ち合わせを行う時、日本語の言い回しが理解できませんでした。例えば「これでいいですか?」、「これでよろしいですか」、「これでいいじゃないですか」等々、言い回しがたくさんあります。テキストで習得した日本語と職場で使われる日本語の違いを痛感しました。さらに、職場で話す言葉を聞き取れないこともよくありました。それらの課題を解決する為に、私はヒアリングの練習に励みました。会社に通う時、携帯電話で NHK のニュースを聞きました。最初は全然聞きとれませんでしたでしたが、知らず知らずのうちに、少しずつ聞き取れるようになってきました。自宅で時間がある時は、積極的に日本のドラマを見るようにもしました。ドラマの中では、敬語がよく使われています。ウェブ会議の時に日本の方がおっしゃった言葉の意味が理解できるようになりました。

お客様とのウェブ会議などでは、自分の言葉で説明することも求められます。設計の意図を説明したり、お客様の質問に答えたりしなければなりません。メールでのやり取りは、考えながら入力することができますし、間違えたところがあれば手直しすることもできます。しかし、対面の会話では、その場で言いたいことを的確に伝えなければなりませんので、会話の能力、表現力がとても重要になります。話すことは、日本語を学ぶ上でとても肝要だと感じています。

今回、「日本語人材育成フォーラム」の機会を通じて、私の仕事と日本語のつながりをあらためて認識することができ、より一層、日本語を学びたい意欲が高まっています。これからは、間違いを気にすることなく日本語を使うことでコミュニケーション力を高め、一日も早く日本人らしい日本語をマスターできるよう、頑張っていきたいと思います。



中日間の架け橋になろうよ
王姝婷（日本航空大連支店）

皆様、こんにちは。日本航空大連支店旅客運送部の王姝婷と申します。今日発表するテーマは「中日間の架け橋になろうよ」です。どうぞよろしく願いいたします。

光陰矢の如し、日本航空大連支店に入社してから、もう一年間が経ちました。小さい頃から日本のアニメ映画に夢中でしたので、私は大学と大学院で日本語専攻を選びました。学校では日本語の文法と単語を中心に学んでいましたが、職場ではもっと実用性が高い日本語を勉強する機会が与えられ、2020年入社の新入社員として、私はとても恵まれていると思います。

新型コロナ禍の中、今 JAL は前例のないチャレンジに取り組んでいます。各国の防疫政策の変化によって、国際線の便数は激減しました。その中で大連線は、中国大陸で唯一旅客便を継続して運航している支店となりました。中国と日本の架け橋となり、私は JAL の一員として、流暢な日本語でお客様とコミュニケーションすることの重要性を痛感しています。

最近、中国への入国政策が緩和され、大連経由で中国に入国する日本籍のお客様が多くなっています。しかし、大連空港での検疫手順は複雑であり、空港から出るまでは1時間以上もかかります。ですから、大連到着後の検疫と隔離の手順がよく分からず、心配されるお客様が数多くいらっしゃいます。こう考えて、私たちは防護服に JAL のシンボルである鶴丸マークを貼り、到着エリアで積極的にお声がけし、できる限りお客様に安心していただけるようにしました。

私にとって、最も印象に残っているのは、3名のお子様連れのお母さまでした。このお客様は中国語を全く話すことができず、小さい赤ちゃんをおんぶして、荷物を3個も持っていました。私は検疫インタビューエリアのところで、この困っているお客様を見つけ、日本語でお声がけしました。このお客様は検疫官の質問を理解できず、お子様もワイワイして大変そうな状態でした。私の日本語を聞いて、彼女は目がキラキラになり、ホッとしたように笑いました。私はお客様の荷物を分担し、日本語でこれからの手順を説明しながら、検疫官の指示も通訳してお客様を到着ロビーの外事弁公室のところまでご案内しました。お別れした時、私はお辞儀をして「今日は本当にお疲れ様でした」とお客様に言いました。お客様は涙が溢れて、「今日は本当にありがとうございました、助かりました！」と返事してくれました。この瞬間、私は自分がやっている仕事の意義を理解することができて、日本語が話せることの大切さも実感しました。

便がない日に、上海の仲間たちは積極的に社員向けのオンライン教育を企画、開催し、社員のスキルアップに力を入れました。最初は、講師はほぼ日本人でしたが、学校で勉強した日本語を利用して、敬語や日本の文化についての授業を開催する中国人社員も多くなっていきました。生徒となった私は、メールの書き方とか、アナウンスや敬語の使い方とか、いろいろと勉強になりました。これをヒントに、私も、学校で勉強した知識を職場に活かし、いつか自分で授業を開催してみたいと思います！

日本語を勉強する意味は、ただ日本語の文章を読めるだけではなく、日本語を実際に職場であやつり、中日間コミュニケーションをする時の架け橋になることが真の意味だと思います。これからも働いている時に、今の気持ちを忘れず、いつも自分の前向きな考え方によって、十分な熱意を持って日本語能力をレベルアップさせていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。



丁寧な気持ちは心までの懸橋
路明 (大連新起点職業技術学校)

「先生、あの方にお礼のメールを送って返事来ましたよ。『困ったことがあったら言ってください、応援してます』という暖かい内容でした」と生徒からメッセージ（中国語で）をもらいました。

その通り、私は先生です。日本語と留学コンサルティングを担当しています。仕事内容は細かいですが、愛しています。生徒たちのために天使になって守っていると言っても過言ではありません。

例えば、冒頭のように、深夜に起きた緊急状況をウィーチャットのビデオ通話を通して解決しました。

その生徒は埼玉から戻れなく困っていたという緊急状況でした。

画面を通して、人通りのない場所が分かり、コンビニを見つけて、助けを求めるしかないと考えて、最寄のコンビニに向かうと指示しました。

ついたところに、30代の男性の方が店を出て車に乗ろうとしました。

「よし、その人にすみません、お願いしたいことがありますと言って、携帯を見せて」と生徒にいいました。

最初はその方がすごく戸惑いの色が顔に浮かんで、私は丁寧な気持ちと丁寧な日本語で事情を説明しました。

「こんな遅い時間で大変申し訳ございません。目の前の子は私の生徒です。日本に行っただけの中国人留学生で、日本語でうまく説明できませんので、代わりに説明をさせていただきたく、お時間はよろしいでしょうか？」と謙虚感を見せながら話しをかけました。

「留学生ですか、こんなところに？」とさらに戸惑いた表情を見せました。

「実はこの子がアルバイトをしに東京から埼玉に来たんです、帰りに財布をなくして、終電も近づいて、非常に困っています」と嫌われないように説明を補足しました。

「そうですか、東京から、ちょうど僕は赤羽に戻るところで、お腹空いてファミマに寄ってね、よかったら赤羽まで送ろうか」と思いもしなかった展開になりました。

「本当ですか」と叫ぶくらいの声で確認しました。

「はい、どうせ一人で眠くなりますから、中国のことを教えてよ」と冗談交じりで生徒に言って下さいました。

なんでこんなに優しいの、なんでこんな運がいいのと思う時間もなく、相手をもっと安心させるのに、生徒の名前と学校の連絡先も伝えました。生徒の身の安全のため

に、車のナンバープレートも確認しました。

その後、赤羽ではなく、家まで送っていただきました。その生徒に一生忘れない貴重な思い出となりました。

また、生徒の代わりに大家さんとの交渉や、警察官に道を尋ねるなどもいろいろありました。

これらは全部中国から携帯（ウィーチャットビデオ通話）を通して相手に伝えたのです。距離と手段を問わずうまく通じたのは、日本人の優しさと丁寧な気持ちの理由だと思います。

言葉は会話の基盤で、言葉がないと成り立てませんが、心まで響くのに気持ちが掛橋となります。同じ言葉であっても気持ちによれば異なるものです。

私自身が日本に留学中の時も丁寧な気持ちのお陰で、友人が増えて、日本社会への融合はしやすくなり、学習と仕事に便利ができて日本生活は楽しくなりました。

「日本語を勉強するのに丁寧な気持ちから」というのを一番の知識として、生徒に教えています。

これを日々の教育に浸透し、日本にいる今は、より深く実感しているでしょう。送ってもらった生徒はきっと丁寧な気持ちでその方と会話をして、相手の心を掴み信頼ができて、家まで送ってもらったという最高の結果に繋がったわけです。

生徒達はこの丁寧な気持ちを維持しつつ、日本語力を高め、日本の良さを広げ、日本と中国のために、有意義なことができれば、私が一日本語教員として誇るものです。



私の仕事に大切なこと
羅垚 （野村情報技術（大連）有限公司）

それは10年前のことでした。卒業して初めての職場で、ある日、隣の同僚が日本側のお客様よりの電話を受けましたが、「はい、はい」って応答しながら、慌ててメモを取りました。電話を切ってから、同僚はほっとしていましたが、すぐ正気に戻り、お客様の言っている主旨を推測し始めました。本人はあまり日本語が聞き取れていませんでしたので、どうすればいいかわからなくて、「はい、はい」としか応答できませんでした。当時の私はまだ新人なので、日本語の勉強が大切であるということだけを感じました。

今現在、証券関連業務部門のチームリーダーになり、日常の業務処理とチーム管理をして初めて、私の仕事は日本語と大きな関わりがあることが分かりました。関わりというより、むしろ毎日の仕事は日本語の問題をめぐり対応すると言ったほうがいいでしょう。例えば、お客様の他社振替依頼書に書かれた振替先の支店名が「鳥山（とりやま）」のように見えますので、メンバーはお客様の書いた通りで入力するルールに従い、「鳥山（とりやま）」と入力しました。ところが、どう見ても「鳥山（とりやま）」のようですが、以前積んだ経験によって、「鳥山（とりやま）」と入力した覚えがなく、逆に「鳥山（からすやま）」と入力したことがありますので、「鳥山（からすやま）」ではないかと疑問に思います。このような日本語の問題を解決できなければ、確実に業務の正確率に影響を及ぼします。それに直接にお客様のお金と関わる仕事をしている私たちにとって、どんなに小さなミスでも、お客様と会社に、大きな迷惑をかけてしまいますから、絶対に許せることではありません。

そこで、日常業務の正確率確保の重要な一環として、メンバーたちの日本語育成に工夫しなければなりません。業務終了後、夕礼の勉強会時間を利用し、適切なタスクを付与することにしました。例えば、日本語単語と読解の勉強会があります。事前に日本語1級レベル相当の読解をやらせて、勉強会で通訳、精読、単語と文法の説明という順番で行います。その翌朝も前日勉強した単語を皆で復習になります。そして、金融知識共有会も開きました。業務に対し理解しがたいルールの金融背景知識を全員に説明し、作業の背景と目的をきちんと理解した上操作してもらいます。また、日本の電話対応について、マナーと対応コツ等をシェアしてから、模擬の電話対応をテストしたこともあります。更に週に1回作業現場で日本語アワーも開催しました。決められた1時間で誰でも何をしても、必ず日本語で会話をします。こういう全面的に日本語総合能力をアップさせるタスクを3年連続実施した結果、メンバーたちの日本語レベ

ルがある程度アップできたほかにも、業務の正確率も高く維持できました。

要するに、日系企業であれば、どの業界でも、どの仕事内容をしていても、日本語能力が必要なので、絶えず勉強しなければなりません。10年前の同僚のように、たとえ日本語がわからなくても、分かったぶりをせずに、ゆっくりお客様と確認すれば、きっと自分の日本語と仕事両方に対し、いい勉強になれるのではないかと思います。



仕事で日本語を楽しもう
金英姫 (大連古野軟件有限公司)

私は大連外国語大学の修士です。4年間ぐらい日本で IT 関連の技術を研修して、大連ソフトウェアパークで10年以上 IT 業界に勤めています。

最初、日本語と英語通訳及びプロジェクトアシスタントとして、Neusoft に勤めて、車載製品のソフトウェア開発に参加しました。実は、映画「2012」で使われた音声でエンジンをかけるナビは当時のチームが開発した製品です。日本 IT 業界では外来語が多く使われており、学生時代の一級レベルの1万個の単語では全然足りません。当時、日立、東芝などの日本会社と連携して開発するため、毎日、大量の技術文書、メール、テレビ会議で、日本の技術者とやり取りをしました。会議で技術者が反応できる技術単語に、自分が全く反応できなかったことは、辛い思い出でした。30 ページの約 2000 個の車載技術専門外来語を覚えてから、やっと仕事がうまくできるようになりました。さらに、プロジェクト見積り会議での商談用語及びお客様とのコミュニケーションも重要です。初めてのお客様との食事は夏でした。「この部屋にエアコンがないですね。」と言いたかったのですが、頭の中は扇風機でいっぱい、「エアコン」は全然出てきませんでした。この恥ずかしさは十年経っても忘れられません。IT 開発業務では、技術用語、商談用語、コミュニケーション能力が全部必要で、日本語の幅広さが重要だと思います。

2014 年に、私は船用精密機器日本一の古野に転職しました。古野は船用製品、医療製品両方を開発しており、船用、医療分野の単語を覚える必要があります。FURUNO ナビは世界シェアの76%を占めています。製品によって、専門用語が違います。医療関連の専門用語も難しく、全部覚えるのは大変でした。同時通訳にもチャレンジしました。さらに、各種の報告書類を作成する時に、簡潔な日本語で書かないと、報告書は長くなってしまいます。日本語の専門用語の広さの上に、日本語の要約力も重要だと感じました。

2015 年から、新しい事業を開拓して、Microsoft Dynamics 365 システム開発を担当しました。IT 業界ではコーディング規約を使っています。例えば、システムで漏れがないように検索できるように、用語の統一が要求されています。具体的には、ある関数を宣言する場合、声明ではなく、宣告でもなく、「宣言」という言葉を使わなければなりません。意味が通じければいいのではなく、日本語の規範に遵守しなければ、バグを修正する時に、宣言した箇所が一つ漏れると、バグが再発されます。また、フィールドの命名の場合、大文字小文字、スペースなど細かいルール通りに作成しなければ

ばなりません。よって、日本語の専門用語の広さ、要約力のほかに、規範さも非常に重要だと思います。

今は、弊社の最新事業の大腸がん検査製品の運営を担当しております。欧米や日本、韓国のような先進国では、大腸がんの発見率が高く、死亡率が低いです。逆に、中国では、大腸がんの発見率が低く、死亡率が高いです。私は今新製品の代理商運営、ネット運営を同時に担当して、弊社の試薬製品を中国全国に広げることで、中国の皆さんが大腸がんから救えるように頑張っています。たくさんの人の命に関わっていますので、たくさんの日本語の医療資料を研究して、十分理解した上で、慎重に宣伝する必要があります。よって、医学領域の知識に対する研修力も要求されています。

私の仕事で使っている日本語を振り返ってみると、業務が変わるのに合わせて要求される日本語も変わり、日本語に対する自分の意識も変わっています。日本語を勉強したおかげで、世界先端の技術に接触するチャンスがあります。これからも、時代や仕事の変化を楽しみ、異なる日本語にチャレンジしていきたいと思っています。



私が体験した学校と職場の日本語の違い
趙欣（大連光洋瓦軸汽車軸承有限公司）

私は日本のYMCA 専門学校で日本語を学習して、京都産業大学に進学し、日本での留学生活を送りました。

文化学部・国際文化学科の出身です。大学では、世界の各地域の文化（アジア、アメリカ、ヨーロッパ）を基礎コースとし、アジアを中心に行っている中国と日本の比較文化、及び日本京都の文化・歴史に関して学びました。また、英語会話基礎演習も必修コースとして勉強しました。多様な視点から文化を学び、異文化を理解する方法と力を身に付けました。

大学卒業後に帰国して、語学力と日本の留学経験を活かせるため、中国の日系企業に勤めたいと思い、大連光洋瓦軸会社と出会いチャンスがありました。現在、弊社の技術通訳を担当しております。

大連光洋瓦軸汽車軸承は日本 JTEKT を本社とし、日本と中国瓦軸集団が合併した自動車用サブユニット ベアリングを製造する会社です。機械学、工学等専門知識を学んだことがない文系出身の私に対しては、入社当初に通訳の仕事で苦労しました。一生懸命に専門用語を覚えても、上手く通訳できなかった事がよくありました。例えば、現場によく使われている“アキシアル振れ/ラジアル振れ”、“ロータリダイヤモンドドレッサ”、熱処理組織名称“マルテンサイト (martensite)”等、このような専門用語を覚える事が難しかったです。

専門知識を持ってなく、職場日本語と学校日本語の違い、及び日本人と中国人考え方の違い、個人コミュニケーション能力の不足など、初めてこの仕事の大変さが分かりました。国と国の文化、習慣の異なりによって、人の考え方も違います。中国人は自己中心的な考え方で意見をはっきり言えますが、日本人はよく相手を尊敬し、人間関係を保つため、はっきり言えない時がありますので、よく相手の意味を確認しながら、正しく伝える事が重要です。

製造工程を理解でき、良く専門用語を覚え、通訳を分かりやすくするため、製造現場に接することが最も重要です。ベアリングを製造するため 旋削、熱処理、研磨、組立という工程があり、更に私に対して、機械用語以外は、例えば、サーボ、アウトプット/インプット、PLC のラダー、各種シリンダー、各種バルブ、モジュール などの電気用語も覚える必要があります。

弊社は新型番の製品立上げるため、日本親会社から技術者のご支援を頂きます。その時、私は旋削、熱処理工程の現場通訳を担当しました。やはり直接にベアリング製造工程に触れて、分からない言葉をその場で日本人指導者や現場作業員に聞いたり、話したりすることによって、専門用語も覚えやすくなると感じます。また、私に意味を理解させるため、日本人上司や中国人同僚もよく熱心に説明して頂き、職場でも色々な

アドバイスをくれました。

そのおかげで、現在、私は技術スタッフと一緒に設備メーカーへ立会検査に行き、機械/電気の現場通訳、メーカーさんとの技術仕様打合せ、新型番工程整備会議での通訳、日本向け部品注文のやりとり等業務を担当しております。また、日本へ技術カラクリ展示会に参加しに行き、日本で開催されたグローバル TPM 見学会中国区域の代表として通訳を経験したこともあります。

技術通訳中に、まだまだ自分自身では不足点がいっぱいあると思いますが、通訳レベルアップするため、さらに人々とのコミュニケーション能力向上、ビジネス日本語強化、英語の学習、及び技術専門知識も身につける力が必要となります。技術通訳では、意味を正確に伝達するため、簡易なメモ取り方、相手に再確認することが重要です。機械用語と電気用語の中、外来語が多くて、直接覚えると困難ですが、その英語も一緒に覚えると、日本語の外来語を覚えやすくなり、英語の専門用語も積み上げられます。(例えば、ショックアブソーバ「shock absorber」、ガイドスリーブ「guide sleeve」)。また、よく設備取扱説明書を読むことで、技術専門用語の積み上げや使い方にも役立てると感じました。

日本語勉強や留学生活体験したことで、日本と中国の文化や習慣の違い、異文化の楽しさを感じて、卒業後の就職へ貴重な経験になりました。そして、日系企業に働いたことによって、日本人「礼儀正さ」、「ルール守り」、仕事で「真面目、慎重さ」、会社に対し「帰属感」、「社員全員が一丸」チームワーク、及び「品質重要」、「お客様第一」、「継続改善」など職場風土は、私にとっていい勉強になり、外国人の視点から日本を再発見するのも興味が深くなります。これは大学勉強の以外、確実に日本職場での「異文化」体験です。

大連光洋瓦軸汽車軸承で働いた事がきっかけで、ベアリング製造の技術通訳を経験させて頂き、日本語の勉強を広げることができました。今までお世話になった、助けてくれた人々達に感謝しております。これからも通訳経験を活かして、仕事も日本語勉強も努力続け、頑張りたいと思います。



考えながら学ぶ

王奕萱孺 （住化商務服務（大連）有限公司）

私は、2006年に大学に入学し、日本語の勉強を始めました。大学の専攻は通訳コースで、日本の歴史、地理、文化や文学史などを勉強し、文学作品及び新聞などをたくさん読みました。大学卒業後、新卒として、BPOで財務関係の仕事をする会社に就職しましたが、大学で学んだ文学や歴史などの内容は仕事とほぼ関係がありませんでした。その後、日系企業へ転職したかったので、現在の会社に入りました。入社後、もうすぐ9年間になります。

最初の1~2年間は、ビジネスマナーと電話やメールの対応方法を一から勉強しました。実務で役に立つ日本語を身に着け、上司と業務上のコミュニケーションができるようになりました。

入社3年目以降、通常の仕事はほぼ把握できたので、新人への教育も担当するようになりました。上司に教えてもらったことに加えて、自分なりに大事だと理解しているポイントを伝えることが大切だと考えました。そこで、この会社へ来てから今まで感じていた日本人のコミュニケーションでの相手への配慮やチームワーク精神を伝えました。

例えば、当社では、メールを受領した後に必ず受信したことを確認するメールを送り返します。これは中国人同士のメールのやり取りではまずありません。それから業務の情報共有のため、その仕事に関係のある先には相当広い範囲にわたってCCでメールを送ります。またその時にはCC内の序列にも注意するようにしています。

当社では海外勤務をしている人の住宅や帯同子女の教育などのいろいろなお世話を担当しています。海外勤務者から何か問い合わせがある時には、聞かれたことだけではなく、規則の範囲でできるだけ本人のためになるよう配慮して情報を伝えたり、取扱いをしたりするよう心掛けています。それにより、会社が社員を大切に考えているという姿勢が伝わることになると考えています。

他にも問い合わせの際には、相手が聞いてきたことだけではなく、やり取りがなるべく一回で済むように、まとめて回答するようにしています。こうすることでできるだけメールのやり取りの回数を減らし、相手の負担を減らすことができます。またプロフェッショナルな仕事の仕方であるとの印象を与え、相手に信頼してもらえることにつながると感じています。

こうしたことは日本的な仕事のやり方のように思います。英語と違い、日本語を使って仕事をするということは、殆どの場合日本人とコミュニケーションを取るとい

ことを意味します。そのため、こうした日本的な仕事の進め方を知っていることが仕事を円滑に進めるうえで大切だと感じています。

今までの仕事を振り返るとどんな勉強もそれなりに意義があることがようやく分かってきました。大学時代に勉強した内容は確かに仕事上直接使用できませんが、日本の歴史、文化への理解を通じて、日本の人がどんなことを大切だと考えているのかといったことがより深く理解でき、うまく仕事をするための前提として役立つように思います。

論語には、「学びて思わざれば、すなわちくらし」という言葉があります。考えずに勉強することは、他人から教えられた内容を本当の意味での自分の知識に転化できず、何の意味もありません。これからも、日本語の勉強を続けていきますが、例えば日本人が大切にしていることは何かといった観点をもって考えながら学ぶことで、日本人の考え方について理解が深まり、結果としてそれが仕事にも役立つようになることを目指して頑張っていきたいと思います。



職場における「上品な日本語」

李慰欣 (大和事務処理中心(大連)有限公司)

皆さん、こんにちは。李 慰欣と申します。民航ホテルにある大和ハウスの大連設計センターで働いています。本日は、日本語に関する自分の思いを発表させていただきます。

学生時代と比べて、日本語の使い方がずいぶん変わりました。この変化については、2つの大切な段階があると思います。

まず最初の段階は、「交流上の変化」です。

私は建築に携わる仕事をしていますので、相手は日本人設計士の方で、話す内容は専門性の高い建築図面の作成になります。

入社したばかりの時、日本人の方が話した内容を私はすぐ理解できましたが、それに対して自分の話した内容は、日本人の方がよく理解できていないと感じました。気づいたことは、自分の話は長く、使った文法も複雑でした。

大学時代にN1のテストには合格しましたが、実際の職場で使う日本語では、テストから学んだことは頻繁に使えません。みなさんも同じでしょう。日本語の初心者として、文法上の正確性を勝手に重視し、難しい文法を使いがちではないでしょうか。

その時わかったことは、日本人の方と交流しなければ、自然な日本語を身に着けるのは難しいということです。その後できるだけ日本人の話し方を真似して、相手が理解しやすい話し方を意識して話すようにしたところ、交流が順調になり、仕事も効率的になりました。

交流上の障害が消えると次の段階になり、雰囲気も注意できるようになりました。

私たちは外国人として日本語の使い方はあまり上手ではないせいで、言葉遣いが硬くてなってしまう、相手に不愉快な感じを与える場合がよくあると思います。

一番反省した思い出は、入社したばかりの時、ある建物の外観図面の変更で、提出時間が迫っていました。もちろん私も早く解決したい気持ちで、事業所の方に連絡した時、「締め切りを守ってください」「すぐ対応してください」と一方的に要望をだしました。その結果、相手側を不快にさせて、怒らせてしまい、「最初の李さんの返事が遅くなったせいだ」と言われて、上司にも「対応が悪い」と報告されてしまいました。

今思えば、その時確かにお互いの対応に問題がありましたが、一番の問題は私の言い方がすごく強くなり、相手に不快感を与えてしまったことです。

もし、その時の「ください」「ください」の言葉を変えて、「早めに対応していただませんか」、「早めに対応していただければ助かります」とか、そのような一言が

言えたら、その時の交流はもっと順調になったでしょう。もし、「私も精一杯合わせます」と自分の思いを届けば、両方とも積極的にその問題を解決できたと思います。

話ということは、人々の繋がりとして自然に生じたものだと思います。音楽や芸術と同じように、自分の気持ちと感情を含めて相手に届くことです。だから、外国人としても、自分の態度と誠意を正しく伝える能力は何よりも大切です。それも日本語能力の大切な一部だと思います。

皆さんは「上品」という言葉を聞いたことがあると思います。私は職場において、どのような日本語が上品だと言えるか、ずっと考えています。

上品な日本語とは、華やかな、芸術的な話し方ではないと思います。日系企業の職員として、良い雰囲気を作りながら話しあうことができ、相手の気持ちも注意できて、その場にふさわしい発言をすることができれば、それが上品な話し方だと言える言葉遣いではないでしょうか。

それは仕事から教えてもらったものです。



日本語を生かし、仕事の中で私が取り込んでいること
劉丹（全日本空輸株式会社大連支店）

日本語との出会いは中学校に入ってからもう20年以上が経ちました。初めは学校試験のために勉強しなければならない日本語ですが、勉強しているうちに日本語が大好きになって、将来の仕事はどのように日本語を生かせるか、こんな期待を持ちながら、大学でも日本語専攻を選んで勉強し続けました。学校での勉強は単語や文法のみならず、日本の文化-茶道なども学んだり、日本語弁論大会に参加したりして、自分の視野も広げることができました。特に大連市キャノン杯日本語弁論大会に参加し、優勝させて頂けたことで、日本へご招待頂く機会を頂戴しました。当時は初めての海外旅行であり、旅自体がとても不安でした。しかし空港で出会ったANA日本人女性係員が、私の不安に気付いたのか、手荷物、搭乗口、座席手配など、とても親切にご案内頂き、あの笑顔と優しい日本語は私の不安を全て解消させてしまいました。その時、私は卒業後日本語を生かして、他の方に安心感を与える仕事をしたいと心の中で決めました。

卒業後、私はANAに入社しました。空港での仕事はチェックインカウンター、搭乗ゲート、到着ロビーなど、さまざまな場所でお客様と接する場面があり、全ての機会日本語の運用が求められます。学校での勉強と違って、お客様に対して日本語の使い方や更に丁寧な敬語の使い方、ビジネスマナーなどを身につけました。お客様に日本と同様、中国にいても安心していただける日本語でのサービスを更に向上させるために、私は社内で日本語アナウンス勉強会、社外に向け空港委託会社への日本語接客教育の担当も引き受けました。また、日本へ行って「バリアフリー」という研修を受講し、お身体が不自由なお客様に対してお手伝いなどの適切な対応に関する講師の資格を取り、大連空港での委託会社への教育を実施していました。毎日の仕事の中で、空港のロビーで、戸惑うお客様、高齢の方、お子様連れのお客様やお身体の不自由なお客様に対して、自分の仕事の専門知識と日本語を駆使し、分かりやすくご案内、そして優しく対応し、お客様の笑顔を目の当たりにすると、この上無い達成感を覚えます。

現在は空港での業務から航空券を販売する営業の仕事に変わり、社内各部署とのやりとり、会議、関係先との交流の通訳など、ここでも様々なシーンで日本語を使わなければなりません。営業で主な担当は訪日旅行で、どうすればお客様にANAの旅行商品を選んでいただけるのかといつも考えながら、旅行社やテレビ局などの方々と一緒に日本の地方都市へ取材をしたり、地方自治体と交流したり、また、自社の関連部門と旅行団体席の調整、旅行会社とマーケットニーズに合わせた商品内容の改善などを

してきました。日頃の仕事の中で、日本語でメールをしたり、電話で話したり、人と対面するなど、いろいろな仕事にチャレンジし、日本語だけではなく、交渉力も向上したと自負しています。まだまだ一人前ではありませんが、自分でもそれなりに成長したのではと感じます。

日本語を学んでいなければ、今の仕事はできませんでした。知り合いや周りの方からは、「毎日どんな仕事をしているの」などと聞かれます。私も時々考えたこともあります。航空会社の一員として、自分の専門知識を生かし、日々お客様目線でより良いサービスを提供し、中日両国の渡航需要喚起に努めています。もっと多くの人に日本を訪れて頂き、自分の目で見て、本当の日本をご自身で体験頂くことが私の仕事の意義ではないかと思っています。これからも日本語を生かして航空会社の仕事を続け、中日両国の交流の中で自分なりの力を発揮したいと思っています。



第二部

パネルディスカッション

テーマ：日本語人材の実践的な活用

パネルディスカッション「日本語人材の実践的な活用」

1 本日のスピーチの所感

大熊： それでは、日本語人材育成フォーラムの第二部のパネルディスカッションを開催いたします。本日司会の日本領事事務所の次席領事の大熊です。よろしくお願いします。本日は、日本語を使って仕事をしている若者代表 10 人によるスピーチを実施していただきました。皆様、非常に日本語が上手で、また仕事をする中で活躍する姿がいきいきと伝わってきて、素晴



らしかったと思います。昨年 11 月に「私の仕事と日本語」エッセイの募集を行ったところ、大連だけでの募集にもかかわらずなんと 120 人近くの方からのご応募を頂きまして、改めて大連の日本語人材の層の厚さ、幅の広さを実感した次第です。エッセイの優秀者に選ばれた 10 人は、ここにいる 4 人の審査員による審査により選ばれました。本日のスピーチは、いずれも困難を乗り越えながら、日系企業や対日ビジネスを行う職場の中で日本語を使っていきいきと活躍する姿を語ってくれました。まず、大連外国語大学の陳岩先生、キャノン杯日本語弁論大会等いろんなコンテストの経験もあると思いますが、本日の弁論大会はいかがでしたか？

陳： ご紹介に預かりました陳岩と申します。まず、弁論大会では参加者の身分が学生と社会人に別れます。キャノン杯日本語弁論大会は中国で最も影響力を持つ日本語弁論大会の一つで、今年で 32 回を迎えました。参加者は延べ 15 万人を超えましたが、その多くは大学生を主とする生徒、学生で、すなわち学生日本語学習者です。ところが今回のフォーラムの参加者は全員、企業で勤務している社会人です。すなわち、日本語を使っている人たちです。次にスピーチのスタイルが違います。



キャノン杯日本語弁論大会は作文です。今回のフォーラムのスピーチは経験談です。作文では起承転結などの文章の技法が重んじられ、ある程度のフィクションも許されます。しかし、経験談は自身の体験を通して得た知識、知恵、教訓をありのままに書いたもので、信憑性が高いです。第三に、スピーチの内容が違います。キャノン杯日本語弁論大会のスピーチの内容は話し手の日常の活動の話題

を中心としていますが、自然、社会、文化、国際等の内容もあります。フォーラムのスピーチ内容は仕事と日本語に集中しています。ほとんどの参加者は職場で自分が学校で学んだ日本語を使う時の体験を如実に書いています。キャノン杯日本語弁論大会と今回のフォーラムとの大きな違いはこうした点だと思えます。

大熊：ありがとうございました。次は斉藤さんに伺います。斉藤さんは、大連市高新区のソフトウェアパークにおいてIT関連業務に携わるとともに、長年に亘り日本語教育に携わられた専門家でもあります。本日のスピーチの中では、大連のソフトウェア、BPOの関係の仕事をしておられる方のスピーチもたくさんあり、改めて、大連のハイテク人材の多さ、幅広さを感じました。斉藤さんは本日のスピーチを聞いてどういう感想をお持ちになられたでしょうか。

斎藤：ご紹介に預かりましたYDDの斉藤と申します。私はコンピュータの会社で長年働いております。今日の皆さんのスピーチが非常に上手でびっくりしました。日本人が会話しているのかと思う雰囲気でも聞かせていただきました。特にIT系に務める方がたくさんいると思います。中でもパソコンに向かって仕事する人が多いと思います。日本語の文章を読んだり、書いたりすることもある。逆に言うと、仕事では、読み書きではなくて、会話することがすごく重要だと、確かに、皆さんも認識されておりました。特に私が思うのは専門用語があるということと、咄嗟の会話をどうするかということが非常に重要だと思っています。この点は、スピーチされた皆さんも認識されており、いいことだと思いました。



大熊：ありがとうございました。それでは、大連理工大学の杜鳳剛先生に伺います。大学で日本語教育者の立場から見ると、本日のスピーチはどうでしたでしょうか。非常に具体的な例をあげていただいたので、学生の皆さまが聞いていたとしたら、社会人になった際、会社でどんな仕事をするのか実例が挙がって興味深いものであったと思います。

杜：こんにちは、杜鳳剛と申します。よろしくお願ひいたします。皆さんのスピーチを聞いてると本当に興味しました。私もそろそろ定年になりますが、長い間日本語教育を仕事としてやってきました。普段、私たちが言語教育を仕事とする人間同士でよく話題にすることが一つありまして、言葉の意味は言葉にあるのか、それとも、人間にあるのかという議論です。今日皆さんのスピーチを聞いて、改めて考えさせられたのは、やはり言葉の意味はその人にあり、その人が愛している仕事

の中にあるのではないかということです。日本語を専攻としている学生にとっては、言葉の勉強は正しい文法、綺麗な発音を習得するのは当然重要ですが、それだけではありません。特に、今日の皆さんのスピーチを聞いて様々な感想がありますが、日本語専攻の学生にとって最も重要なのは、表現手段としての言葉以外に、日本の社会、日本の文化、日本人に対する理解が何よりも大切ではないかと、私は思います。

大熊：ありがとうございました。続きまして、高木さんは、約750社の会員企業を擁する日本商工会の会長であり、また、開発区で多数の社員を擁する日系企業の総経理でもあられます。企業経営者の立場から、本日のスピーチをどう聞きなりましたでしょうか？



高木：皆さん、こんにちは。大連日本商工会会長をしておりますLIXILの高木と申します。皆さんのスピーチを聞いて大変感銘を受けております。なぜかといいますと、日本語を通して仕事の話をしていただいたんですけども、皆さんが経験してここで話していただいた話は、これは日本人でも中国人でも社会で仕事する人が、一番大事にしなければいけないポイントをみなさんそれぞれもっていること

とがすごくわかりました。逆に、私がもう少し若い頃に聞いていれば、もっと成長できたのではないかという話はいくつもありました。当社もそうですが、多くの日系企業が大連に会社を構えています。その中で、大連の日系企業が成長しているのは、今日スピーチしていただいた皆さんのように日本語を活用して、それぞれの仕事に活かした方々の貢献が大きいと思います。特にいろいろな通訳という話も出ましたけれども、通訳というのは正しい言葉を伝える、ただし、仕事になると、相手が何を思っているか、どんなことを伝えたいかという相手を思いやるという理解力が大変重要になってくると思います。今日、スピーチされた皆さんは、そういったことをすごく重視されており、それが日本人らしさとか、日本の考えであったり、謙虚さであったり、ルールを守るといったことが、言葉に表れるのではないのでしょうか。聞いていて、楽しくなり、又、自分で今日聞いたことから反省し学び、また、会社の皆と仕事できたらと思いました。ありがとうございました。

2 社会の中で役立つ日本語

大熊：ありがとうございました。非常に素晴らしい専門家の方々の評価をいただきました。やはり日本語能力という言語の技術を超えた全人格的話であったり、あるいは仕事をする個人の意気込みであったりと、そういうところが大事であると思いました。それでは議論を進めたいと思います。

日本語教育と仕事を語る時によく言われる言葉として「日本語+ α 」、または「 α +日本語」は、これまで何度も議論されてきました。つまり日本語を専門とする人が日本語以外の能力をどうやって身につけるのかという問題、もう一方で日本語以外を専門とする方がどのように日本語の力を身につけていくのかという二つです。本日のスピーチからも、大連では、日本語学科の卒業生、ソフトウェアを専門とする大学生の比重が比較的多いと思いますが、そういったなかで、例えば、財政金融、工学、建築、化学など理系学科を学ぶ方にも日本語を活用するチャンスが広がっている状況がある。一方で、今日は日本語学科の方が比較的多かったと思いますが、日本語学科を卒業したけど、技術通訳として活躍している話も聞いて非常によかったと思っております。本日のスピーチで、会社で使う日本語は、専門用語がたくさんあって、大学で学んだ日本語と全く違う、ということがよく触れられたかと思います。大学で学んだ日本語は社会で役に立つのだろうかと思った方もいるのではないかと思います。大学生が学ぶ上で何が必要なのかということは非常に関心のあるところ。ここで杜先生に伺いたいと思いますが、現在、こうした大学における日本語教育とその他の分野での教育や人格形成など大学ではどのような取組をされているか簡単にご紹介いただけますでしょうか。

杜：私が勤めてる大連理工大学ですが、理科系大学の中で中国で一番早く、理工系の学生に対する日本語教育を実施してきた大学だと思います。60年代からすでに大連理工大学の先生が理工系専用の日本語教科書を編集したりするという取り組みをやっていました。当然、私の先輩の皆さんがやってきたことですが、日本語専攻としては、大連理工大学はまだ歴史が浅く、そんなに長い歴史はないんです。特徴があるのは、1985年あたりから、理工系専攻で+日本語専攻というのが、中国語で言いますと、「日本語強化クラス」という新しい専攻科目を設置しました。それも日本語教育の新しい試みで、例えば、一番最初にできたのは機械学専攻の学生を五年間在学させ、最初の一年間は日本語を中心として勉強して、2年目からは、機械学など専攻の一部内容を、日本語で授業を行うというやり方をやってきました。大連理工大学の幾つかの専攻で日本語強化コースを作ったのですが、その専攻の卒業生は、理工系の知識を基として、英語、日本語も修得している。社会で歓迎される人材の育成になったと思います。教材の作り方も理工系大学の特徴をいかに出すかという考えで、専門用語というレベルを超えて、教科書の内容も理工系の特徴を反映出来る工夫をしました。最近では、インターネットの利用が盛んになって、皆さんのスピーチの中でも専門用語のことがありましたが、昔悩んでいたような問題は簡単に解決できるようになりました。そういう利用に関しては、むしろ学生は教師よりも、活用しているようです。皆さんのスピーチを聞いてから一つ考えたのは、大連の日系企業で皆さんが活躍



されているので、大学と手を携えて、これから日本語人材の育成の面でいろいろ交流できるのではないかと思います。

大熊：ありがとうございました。これまで、何度か議論してきたのは、本当に大事な力って何のだろうっていう議論です。前々回の議論では、日本語+αといっても、もっと大きなα、それはコミュニケーション力あるいは思考力である、ということをおっしゃってくれた先生がいらっしゃいました。今日のスピーチを聞いて、私も一つ感銘を受けたキーワードがありまして、異文化交流の楽しさということ言ってくれた方がおりました。まさに、こういう考え方ができる方がコミュニケーション能力を高めることができるのかなと思いました。仕事の中で、例えば、日本企業で働く上で一番よく聞く日本語として、ハウレンソウという言葉があります。ご存知の通り、報告、連絡、相談のことです。ある意味では日本企業文化を象徴する言葉だと思います。また、メールの書き方の話もありました。それから、大連の会社と日本の本社と色々な形でやりとりとして、製品・サービスを提供していた姿も紹介されました。ここで斎藤さんに伺いますが、若い社員の方に教育する機会があると思いますが、このように大学を卒業して、社会に入った人たちに対してどのような日本語教育を展開されておりますでしょうか。

斎藤：企業の中では、ハウレンソウを非常に重要視しています。私も中国人に対して「ほうれんそう「菠菜」は分かるよね。菠菜を食べたら元気になるよね。ハウレンソウしたら元気に会話できるよね」ということを話したりしています。ハウレンソウはコミュニケーションのなかで一番大事なことで私には考えています。私の会社はIT企業ですので、25歳ぐらいから35歳ぐらいまでの若い人たちに対して日本語の会話を教えています。特にコンピュータの専門用語を使いながら、教えております。そんな中でコミュニケーションが重要だということを教えて、基本的には3点ほど意味があると考えております。まず、第一点としては、会話は口を動かすこと。今日の発表者の中でも口をよく見ていました。口をよく動かす方は、言葉が非常に綺麗です。唇をよく動かすことは、日本でも中国でも重要です。だから唇を動かして話しなさいと言っています。例えば、言葉が間違えていても意味が通じることがあると思います。しかし、それだけではだめですよ。もう少し話をしないとダメです。意味が分かったとしてももう少し話しをしないとダメです。特に中国の方は「はい」、「分かりました」と言って会話を終わりにしてしまう方がいます。私はそれではだめですよ、次の会話を続けてください、もう少し会話したらもっと分かりやすくなりますよ、「分かりました」だけではだめです、と言っています。2点目としては、会話中では、少し会話のストーリーをつけないといけません。論理的な会話をする、論理的な内容をつけるということが重要であると思っています。会話の中では最近の言葉でいうと「ロジカルシンキング」という言葉があると思います。会話の勉強の中でも「ロジカルシンキング」のものを採用しながら授業をしています。そういうストーリーができるように話しなさいよということも私は言っています。3点目として、雑談をするということ。仕事の真面目な会話だけでは、コミュニケーションをうまく取れないこともあります。どんな雑談でもいいんです。具体的に言うと、日本の文化、習慣の話を

する、中国の文化、習慣の話をするということも重要です。私は中国人と会話するために色々などころに行きました。中国人の方に出身はどこですかと聞いて、「私そこ行ったよ、こういうのあったよね」というと、中国人も身を乗り出しながら話をしてくるので、コミュニケーションが変わってきます。それと同じようにみなさんも日本人と話をする時は日本の文化、習慣を勉強したら、日本人ともっとコミュニケーションがとれるようになると思います。例えば、最近の言葉で言えば「地震」や「津波」という少し悲しい思い出もあるかもしれませんが、そんな会話をしたら「津波大変でしたね」とかまた違った会話、雑談をすることができるということがあると思います。私はこのようなことを気にしながら日本語の会話を教えています。

大熊：ありがとうございます。非常に興味深い話をいただいたと思います。私自身も中国語の専門として仕事をしてきた人間ですが、まさに口を動かしてストーリーのあるお話ができて、なんでも雑談ができるということは非常に難しいことだと思います。それができるというのはやはり人間そのものの魅力があって、日頃からよく色々なことを勉強している、あるいは色々なことに興味を持って社会に接している方ができることなのかなというふうに思います。やはりそのようにどんどんチャレンジすることの重要性を斉藤さんから教わったような気がします。ありがとうございました。続いて、高木さんに伺いたいと思います。高木さんは企業の経営者ですので、採用も行っていると思います。会社中には技術系の方、秘書系の方など、色々あると思いますが、会社の中で役に立つ日本語、会社の中で磨いてほしい日本語能力はどのようなものがありますでしょうか。

高木：日本語の通訳をしているメンバーはうちにも何人もいますけれども、それぞれ日本語のレベル、喋り方、いろんな方がいます。通訳のメンバー、それから、日本語を話すメンバーと話す時に、一番何を重要視するかというと、質問ができるかどうかということなんです。要は、相手は言っていることに対して、自分が分かったのか分からなかったのか、そして、相手の意図がきちんと自分の考えとあっているのか、会話ができていないのか、ということをごく重要視します。自分の考えと相手の考えと違ったから悪いというわけではなくて、その違いが何なのかということを実は一番学んで欲しいところです。中国の方は、スピーチにあったように、すごく自分の気持ちををはっきり言う方が多いです。逆に、日本人は、ニュアンスを隠しながら、その状況によって、相手に委ねる、伝わってほしい、気づいてほしい、そういう弱い感じがあるんです。ただし、そこにはどうしても強く言えない、うまく言葉で表現できない、気持ちを相手に表してもらいたいということもあると思います。ただ、それをうまく伝えきれない考え方の違いの部分があるので、どうしてもそこを埋めていくためには我々も中国の人たちと話をする時、わからないことはわからないと質問しますし、相手からやっぱり質問をもらって、その差を埋めていくことができるのです。そういう人材を強く求めます。また、技術系、秘書系ということ会社に入る前に分けなければいかというと、その必要はないと思います。それは、会社に入って、会社の仲間と話をしながら得る方が、一番自分の成長を自分でも実感できますし、職場の周りの人にも実感してもらえるとと思います。特に日本企業は一致団結して皆で成長することを柱としていることが多いので、そこを自分が一番頑張らなければいけ

ないという考えよりは、皆と一緒に頑張っていくという考えの中で働いてもらえればすごくいいと思っております。

大熊：ありがとうございました。高木さんの発言の中で、質問ができるかどうかということがありました。質問力というキーワードがあって、いい質問ができるということは私も非常に大事であると思っています。いい質問をするためには、自分がきっちり考えていて、自分が分かることと分からないことをはっきりさせて、はじめてできることだと思います。「何々は何々ですか？」だけでは答えは返ってこない。「私はこう思うんですけど、私はこういう人物なんですけど、何々はどうですか？」ということで答えは初めて返ってくる。この質問力がコミュニケーションの一つとして大事なかなと思っております。陳岩先生は、これまで実用的な日本語教育について、非常に長年研究されてこられました。文法の基礎も大事ですし、実用性も大事ですけども、そういう中で、今後この実用的な日本語ということに関して、将来の大学教育はどのようにあるべきでしょうか。

陳：なかなか難しい問題ですけども、日本語教育には、その目的から大別して二つあります。一つは、学術的目的で学ぶ、アカデミック日本語で、もう一つは、ビジネス日本語です。仕事のためです。今中国大陸の日本語専攻の大学は千校近くあり、その大多数は応用的専攻です。しかし、応用的専攻でありながら、実際はビジネス日本語の教育理論、あるいは方法論の下で、授業を行う大学はほとんどありません。なぜかという、ビジネス日本語の歴史はまだ浅いので、その理論の面での裏付けはまだほど遠いものであると言わなければなりません、聞く、話す、読む、書くを中心とする考え方がとても根強くて、ほとんどの日本語教育機関ではやはり、昔のまま教えています。もちろん、日本語教師のビリーフや資質能力などの問題もあります。一般日本語教育あるいは伝統的日本語教育と比べて、ビジネス日本語教育は以下の特徴があると思います。学習者中心の日本語教育です。研究よりも実務です。理論よりも実践です。言語向上より言語使用を重んじる。言語能力より社会言語学的能力を重視する。単なる言語運用より総合的なコミュニケーション能力を重視する。分かる能力よりできる能力を重視する。言語的正しさより実務的效果を重視する。商務知識、ビジネスマナー社会文化的知識が不可欠である。ですから、文法能力あるいは言語能力をどう扱えばいいのか、という点につき、私の考えでは、特に科目として設けなくてもいいと思います。すなわち、例えば、文章理解のために文法現象について説明すれば良いのではないかと思います。ある意味、ビジネス日本語は理屈抜きで覚えていいと思います。

3 日本語人材の活躍の場

大熊：ありがとうございました。続きまして、本日の感想に移っていきたく思うんですけども、各先生方から一言ずつお願いしたいと思います。我々在大連領事事務所は陳岩先生をはじめとする大連の日本語教育機関の関係者とともに長年協力してまいりまして、日本語人材育成フォーラムを

実施し、今年で4回目になりました。年1回のペースで開催しています。このフォーラムを開催する目的の一つとして、大連ではたくさんの大学がある中、日本語教育機関の方々と大連にある日系企業の皆様との間の連携が深まることを期待して実施してまいりました。もっとも、日本語人材の就職先は日系企業だけではありませんし、就職先が大連でなければならないということもないと思います。別に北京、上海、深センで働いてもいいと思います。逆に大連以外の出身地の方が大連で活躍していこうという状況もあるでしょう。日系企業だけではなく、中国企業、欧米系企業でも日本語人材がたくさん必要です。このように日本語人材のニーズというのは非常に多様化していると思います。そうした中、大連市政府は日本との交流を大変重視しており、我々日本側としても大連市の経済が発展し、大連市と日本の経済貿易関係、文化交流関係が活性化することを期待しております。そのなかで、大連の特徴はなんでしょうかと聞かれたら、やはりそれは日本語人材であるという声が一番多く聞かれます。一方で、卒業生が大連に留まらない、あるいは日本語人材にとって魅力的な就職先がそんな多くないというような声も聞かれますし、またその一方で日系企業の側からすると、優秀な日本語人材の採用が難しいといった声もあります。こうした点をめぐって皆様の意見を伺いたいと思います。まず、斎藤さん、現在の大連の高新園區のソフトウェアパークでの日本語人材をめぐる状況ついていかがお考えでしょうか。

斎藤：大連のことを色々話されましたが、大連と日本の特に IT 関係の繋がりはずでに 20 年以上あると思います。IT の仕事というのは個人でする仕事もありますけど、チームで開発をするという仕事が沢山あります。大連を離れている人もいますが、大連には日本語人材が働く場所がまだ沢山あると私は思っています。私の会社のことを言いますと、日本語専攻の人材を採用するのではなく、違った専門の人を採用して、当社に入社してから日本語を最初から勉強するということを義務づけています。大学の日本語教育との繋がりはずの会社の場合また違ったものがあると思っています。大連の会社は 20 年以上経っていますので、優秀な人が非常に沢山いると思っています。この点は、大連が中国の他の都市や東南アジアの諸外国と比べても、優れた点をもっとたくさんあると思います。大連としてももっと PR する必要があるのではないかと思います。熟練した人がもっといるのではないかと私は思っています。就職活動においてどうかということですが、大連ではなくて、北京とか、上海とか、南の広州の方に行ってしまう人が結構いるかとは思いますが、大連でも IT 系の仕事はまだ日本語人材には沢山あると思います。これからまだ、日本語人材としては仕事は沢山あるということを考えてほしいなあと思っています。それから、人の採用についてはいろんな能力も求められると思います。私が考えているのは幾つかあります。まず一つは、企業から見ると給料の問題もあります。2つ目に仕事の将来性の問題が確かにあると思います。企業から見れば皆さんの昇進・昇格の問題もあると思います。それから IT 系またネットワーク系を含めてこれからの最新の技術をどうするかということもあるかと思えます。そのようなことから、中国のこれからの採用を考えると、中国で言えば 90 年代、2000 年代生まれの方々の気持ちをよく考えながら採用を考えていく必要があるかと思えます。それには企業側の問題もあるかと思えます。企業は当然利益を追求していくこととなりますので、学生の方の考えとすれ違いが生じることもあるかと思えます。

そういう意味では、結論的な話ですが、「産学」（企業と学校との結びつき）、また「産学官」（企業と学校と官庁）という言葉もありますが、そうした連携をしていけば、大連として、また採用活動としてもいい方向にいくのではないかと思います。こういうこともこれからの課題として検討・討論していても面白いのではないかと思います。今日はせっかく官庁の方がいらっしゃるのこういう提案をさせていただきました。

大熊：ありがとうございました。産学連携、産学官連携の話をいただきました。実は本日のイベントは大連市対外友好協会の後援をいただいております、我々日本人もお世話になっている大連市外事弁公室、大連市商務局の日本語のできる職員と、最近外事弁公室と商務局に入ったばかりの若手人材が参加しています。後ほど交流の時間を設けてございますので、ご紹介したいと思います。それでは杜先生に伺います。大学教育から見て大学卒業生の日本語を勉強した卒業生の進路についてどのような状況になりますでしょうか。

杜：最近、日本語専攻の学生の就職難の話をよく耳にしますが、一方、例えば大連理工大学の日本語強化クラスの学生は皆、わりとスムーズに就職先が決まっております、いろいろ違いが出てきています。例えば日本語専攻の学生にとっては、もう既に日本語を学ぶという時代ではなくて、これからは、日本語で学ぶという時代に入るんじゃないかと思います。特に今の世の中を見てみると、私が大学を通っていた時と比べると、言葉の勉強にはいろいろなツールがあり、手段があります。昔大学四年間で、勉強してきた知識などを、今は二年間ぐらいの時間があれば身に着けることができるのではないと思うぐらいです。日本語教育、言葉の教育が進歩してきているんです。したがって、大学に在学して、その4年間何をするか、時代のニーズに合わせて日本語で何かを学ぶかということは、大学在学学生、特に日本語専攻の学生に求められているんじゃないかと思います。そうであれば、皆さんはそれぞれ、特に大連という立地もありますし、就職に関しては問題ないのではないかと思います。明るい将来をそれぞれ持っていると思います。

大熊：ありがとうございました。それでは高木さんにお伺いします。日系企業から採用難の話も聞こえて来ますが、実際のところは如何でしょうか。また、日本語人材を生かした大連経済の活性化、日系企業のさらなる活性化について、少し大きなテーマですが、どのようにお考えでしょうか。

高木：ものすごい大きなテーマなのですが、日本企業側から見て採用難という話ですが、私の感覚でいうと求めている人材がすこし変わってきているふうに感じています。やはり大連に企業が参入してきた時には、多くの日本人駐在が来ました。その時に日本のやり方、日本の考え方、また中国の人と合わせた新しいやり方を組みあげていく時に、どうしても通訳の役割が大きいので、いろんな企業で通訳という仕事がすごく大事な時期があったと思います。今は時期が経って、それぞれの企業で形が出来上がってくると、今は日本人が中国の人に教えるのではなくて、日本企業の考え方を理解し、現地の企業を経営する立場の人をだんだん欲しくなっているというのが実情だと思います。

その背景として、日本人駐在の数が少しずつ減って、現地の中国の方々任せようという各企業さんの方向性ができていると思います。そういう面から考えるとやはり日本語だけではなく経営技術の分かる方や、いろんな経験を積んだ方を欲しくなっているというのが一つあると思います。ただ、今の日本語を専攻される方々が、就職がないわけではなくて、日本語をどのように自分たちで活かせばいいのかということ企業側に伝える機会がないと思うんですね。ただ単純に企業に私が日本語できます、採用してくださいと言われとも、企業側としてはそれで本当に何ができるのかなという思わざるを得ない方もいますし、そういう機会ができていないということもあると思います。ですので、学生の方が職場体験をもっと多く持てれば、自分がどんな職種にあっているのか、どんな職種をやってみたいのか、そのような将来を考える場を政府の方も協力してもらって与えてもらえれば、大連に日本企業がいっぱいあるので、職場体験を通じて日本語を学んでいる学生たち、若いたちが自分の将来を考える場ができ上がるのではないかと思いますし、一つ新しい採用の仕方、企業の成長の仕方が見つかるのではないかと考えています。また、若い人が日本語だけではなくて、様々なことに興味を持つということをお願いしたいと思います。

大熊：ありがとうございます。本日、日本貿易振興機構（JETRO）の重岡所長がみえておりますけれども、先週のJETROのオンラインセミナーで同じようなテーマの話がありました。その中で私が感銘を受けた、ハッとしたことがございまして、日本企業が採用をより良くやっていくためには、もっと日系企業が自身の企業のことをアピールしていくというベクトルが大事なのではないかと、いうご指摘がございました。例えば、CSR活動です。企業がどのようなことをやっているのか、より具体的に求職をする学生さんに伝えていくかが問題としてございました。そのような点も大事かなと思います。それでは陳岩先生、最後のまとめをお願いできればと思います。

陳：とてもレベルが高く、示唆に富むフォーラムだったと思います。私は中国日本語研究会大連分会を代表しまして、在大連日本国領事事務所をはじめとする大連日本商工会や関係企業が長期に渡り大連の日本語教育にご援助いただいていることに心より御礼申し上げます。領事事務所が日本語人材育成フォーラムを主導することは、創造的な意味を持つ新しい試みで、日本語教育における日中協力の新境地を切り開く示唆的な意味があると思います。これからも、領事事務所や、大連日本商工会にもっと交流の機会やインターンシップの場を提供して下さるようお願いいたします。大連にはとても優れた日本語教師陣があります。先生方が新しい変化を見つめ、新しい教授法を導入し、社会ニーズに応えられる日本語人材をたくさん育てていただくことを希望したいと思います。また、発表者の皆さんも、より洗練された日本語をより巧み使い、自分の職務をやり遂げ、着実に人生の道を歩いていただきたいと思います。

大熊：4人の先生方、ありがとうございました。

